

大里製粉時代（金子三次郎の回顧録「随心録」より）

大里製粉所では、私は原料倉庫係であった。毎日九州各地や中国地方から買付けた小麦が貨車で到着するので、これを品質検査をして検量を行い、倉庫へ収納し、外国小麦は N.Y.K（日本郵船）のメール船や鈴木商店のチャーター船で門司港に入港するので、これを本船に出張して船内に荷物が残らぬように、人夫や女人夫を多数連れて出帆する迄、船内に残荷の出来ぬよう空袋を多数持参して収集することが役目である。

輸入小麦の際は、門司税関に輸入の手続をするのも大変な仕事だった。輸入通関の際、検量の目方によって輸入税の支払が非常に高くなったり安くなったりするので、一万屯も通関する時は非常に苦勞するのである。

（昭和 39.11.1 記）

（徴兵検査）

男子が満廿一才に達すると全国の男子が検査を受ける事に定められておいて、これに合格すると新兵として軍隊に入隊せねばならぬ定めであった。一度入隊すると二年間は軍隊生活をせねばならず、満期で除隊しても予備兵としていつでも徴集せられることになり、三十五才位になって今度は後備兵として銃後を守るわけである。

日露戦争などの如き大きな戦があると予備兵は勿論のこと後備兵も全部操出し、なほ不足の残る時は補充兵や国民兵や学徒兵を集めるわけである。長男の孝藏の如きは学徒兵として、法政大学の二年生であったが、今回の太平洋戦争で徴集せられて善通寺の聯隊へ入隊して、ついで松戸の工兵隊に廻り、工兵少尉として満州へ出隊したような事になる。

当時でも、何とかして兵役をまぬがれる事が出来ればと、本人は無論家族の一同が色々心配したものである。どこかの神社とか観音さんとか稲荷さんなどへ御願をかけたに行ったもんである。

私は幸か不幸か平素の勉強が強かったか、読書が過ぎたか、軽い近眼にかかっておったので、此の時に丙種に移されて免役となった。検査所は福岡県の小倉の附近だったと記憶しておるが、当日は土地柄、田舎の百姓出身者が多数で、皆頑健なからだの若者ばかりだったようである。

幸ひ兵役をのがれたので、其後は会社の仕事に専念することが出来たし、又其後の大戦にも召集をされることもなく非常に仕合せだ。

（昭和 39.11.20 記）

（欧州大戦）

1914 年（大正 3 年）、セルビアの一角の号砲から世界戦争が巻き起こったが、此の戦争の初期は吾国では、此の戦争の発展の程度などの見通しが困難であったのと、一時は通信の困難の為に一年か二年目位は未だ非常な不況が続いておった。

(香港転任のこと)

大正四年の春頃に、私に香港支店へ転勤するようにとの命令が神戸の(鈴木商店)本店から来た。これは、香港の支店が^{おいおい}追々発展して行くので人手が必要であると云ふことと、香港で石炭を取扱ふ事を始めるので内地から寺坂君と私が行くことに決ったわけである。この転勤は勿論栄転と云へるものであるから、私も不安^{なが}乍ら大いに活動する心構へであった。

送別会を開いて貰^{もら}ったり、記念品として金^{きん}側^{がわ}の腕時計をいただいたりした。一度神戸の本店に戻り、神戸から香港へ渡る予定であった。

(大里製粉工場の火事)

何^{なに}分^{ぶん}五、六年間も勤めた関門のこととて、名^な残^ごりおしく思っ^{おも}て一日、二日と出発を延ばしておったが、いよいよ一兩日のうちに門司を出発と決めて大里製粉所の裏の合宿所で夢を結んでおった^{ところ}處、その日の朝五時か六時頃、大きな声で「火事だ」といふ叫びが耳をつらぬいた。

私はすぐにはね起きて、その火事が工場本館の第一階のスパウト(製粉のエレベーター)附近である事をたしかめ、直ちに現場にかけつけたが、加勢は猛烈であって一階の下から五階迄つづぬけになっておるエレベーターをつたってひろがり、製粉のビ粉(原文ママ。“微粉”のことか)に着火し、工場はたちまち五階まで^{かえん}火焰の海となって手のつけ様も無かった。

工場の消火隊や町のポンプなども死力を尽して防火につとめたが、何等の効果も無かった。私は原料倉庫の^{もんび}門扉を閉じて延焼を防ぐよう手当をしたが、その時はすでに倉庫の棟裏を南から北へ火焰が走っておった。

この火事は非常に猛烈な火勢だったので、遂に工場本館、原料処理室、発動機室など全て焼失し、原料倉庫も三棟共、棟が落ちて原料小麦も焼失した。別館の製品倉庫も延焼して製品も焼失したし、残った製品も全部浸水することになった。

残ったものは離れておった事務所、合宿所、材料倉庫位だった。此の火事は損害額では相当多額に上った。浅田支配人は此の善後処理^{および}及保険金受取りの為の保険会社との交渉などで非常に心配せられ、解決が永^{なが}引き約半年から一年位非常になやまされた。

私は前記の通り既に香港へ出発するまぎわであったが、此の火事さわぎをあとに見て香港へ立つに偲びず、遂に香港行きをことわって浅田支配人と起居を共にして、保険整理^{てつだ}を手傳ふことに決心した。

保険金額は当時の金額で五百万円位だったかと思ひます。保険会社の団隊代表者は東京海上で、その交渉は神戸に移って毎日(鈴木商店の)本店の二階で帳簿整理や書類の作製をやった。

兎^とに角^{かく}永い時間をかけたが、本店重役などの尽力で解決したので、私は(鈴木商店)下関支店の新設石炭部詰めとなり、石炭をやることになった。これが、私の石炭に係^{かかわり}る始めであって、遂に後年石炭と係^{かかわり}が深くなる動機であった。(昭和 39.12.1 記)

私の製粉会社時代は三年間か四年だったが、十九才から廿三才位の働きざかりだったので、非常に熱心に仕事をやった。その為に当時の（鈴木商店）下関支店長だった西岡貞太郎氏に深く認められ、後年小生の会社生活の位置を決める基になったと思ふ。

（原料小麦のグルーテン%）

小麦にグルーテン（タンパク質）が含まれておいて、此の%の大小及性質によって強力、弱力が決まり、麩屋向き、パン屋向き、うどん向き、まんじゅう屋向きなどが決まる。%の強いものは50%もあり、低いものは20%しか無いものもある。

これを、小麦を一見して適中さすことは六可敷いことであるが、慣れるとやれる。私はあらゆる小麦を試検して、遂にこれを当てることに成功した。

（大里製粉所の機械）

大里製粉所の製粉機は元香港にあった。（香港の）製粉工場の機械設備をそっくり買収して大里へ据えたものである。この機械の買付けには鈴木から数人の人々が出張して受取って来たものであるが、その一人に友人、福井源吉君が加わっておった。

建物は煉瓦造りの五階建てで立派なものであるが、中身の機械が古物であった為に相当旧式のものらしく、五階の上にある篩機のジャイレーターが常に故障が続出して運転を休止することが多かった。原料から製品にいたる迄連続自動になっておる為に、五階が故障すると全体の工場の運転が止まる様である。

最後には五階のジャイレーターを全部取はずし、米国製の最新の篩機に取り変へた。これは、プランシッターと云ふ形式のものである。これを据へてから故障が無くなって運転が順調に進む様になった。

従而、業績も向上して優良品が出るようになったが、それ迄は赤字の連続だった。聞く所によると、米国では古い製粉工場では相当使用した機械は他に転用するなどのことはせず、五階の窓から又四階、三階から古い機械は地上にほうり投げてスクラップにして、たたきこわしてしまうそうである。

尚ほ、後で聞くと、香港の工場時代にも運転が故障が多かった為か、又経営が不良だった為か、工場長は苦悩の上自殺をした因縁つきのものだった。将来、事業を計画するものは、機械設備などは充分調査の上最新の優良品を設備する必要がある。

（白ワラ、赤ワラ）

米国から輸入する原料や麦の和名、白ワラ、赤ワラと称する種類があるが、これは東洋方面に原料として輸出する為に、特に白いクラブ及ブリュウステーム、褐色の小麦など三種類ほどグルーテンの軽い品種を混合して何千屯も積出して来るものであった。

特に赤ワラ、白ワラなどと云ふ品種があったわけではなかった。
こんな単純な事柄でも当時の日本の業者は知らなかったのである。

鈴木商店が新造した富国丸、報国丸などの新造船（3,000/5,000 Ton）が、米国と門司の間を小麦を運ぶ専用船として使用せられた。

又 Canada 産のマニトバ小麦はグルーテンが多くて強力であるが、これを初めて大里で輸入した。汽船に満載して来たところが自然水分が多くて、大里の倉庫に貯蔵中に水分がむせて熱が出た。手を入れると焼ける程熱い。

遂に、此の為にグルーテンが醗酵してボロボロになり、麩がきれるようになった。
色々苦心をして処分をしたが、乾燥の大切なことを痛感した。

思ふに米国ではサイロに貯蔵する際、適当な乾燥機にかけて水分を除去して貯蔵するものと思ふ。

(昭和 39.12.21 記)

(製品の自然水分のこと)

日本の気候が湿気が多い為に、麦粉の如き商品は大気中の自然水分を吸収して常に 12%位の水分を保つことになる。

従而、^{しながつて}検量包装の際に 12%以下の水分のものを装入しても、貯蔵中に 12%迄に増加する。

この為に、パックする時の製品水分を初めから適量に調整することが肝要である。

仮に 1%~2%の微量であっても、会社一年間の純益は相当巨額に上る。

こんなことは他の商品にもたくさんある事と思ふ。

(昭和 39.12.23 記)

大里製粉所の終末（金子三次郎の回顧録「随心録」より）

前記の通り大里製粉所は火災を起して事務所以外は丸焼となったが、永い交渉の保険金問題も片付いたので立派な新工場を再建する事になり、こんどはアメリカから最新式の機械を輸入して二セットを据付けた。

先進国の America では製粉工場の如きプラントは原料整理から製品の終末迄自動的に揃ったセットが簡単に売出しておるから、古い工場では改修などをせずに、取替の時は全部新品でセットで据付ける。

この新式が運転を始めると故障などは一度もおこらず、至極スムーズに試験運転をやった。製品の歩留りは良くなるし、製品の品質も極めて良好である為に生産費も他社に劣らず、利益がどんどん上昇した。販売は全国的に手を広げておる鈴木商店がやるのだから、競争会社の日本製粉などでは大変に脅威を感じるようになった。

大里製粉では余力が出来たので北海道でも札幌工場を設けて益々勢力を強大にした。さきに日糖（大日本製糖）が大里製糖の活躍に困ってこれを買収したが、今度は日本製粉が大里の為に押される立場になった。

遂に日粉（日本製粉）も大里（大里製粉所）との合併を申込んで来たが、日糖の時と同様、大里は合併を承知しないので、これも買収することに決めた。工場売却のことは（鈴木商店の）本店で〇様が当っておられたので、内容のことは私はくわしく知らぬが、何れ非常に有利な値段で売却に附せられたものと思ふ。

ところが其の後、不思議なことに大里（製粉所）を買収してからの日粉は昔の日糖と同様に経営が行詰って会社は破算（破産）一歩手前迄の状態になった。

そこで、日清製粉に合併を申込んで、日清も一度其の気になって話がまとまるかと思えたが、会社の内容を仮に調査した處、かくれた損失が非常に大きい事が判明して、遂にこの話はせとぎわで破談となった。

此のために日紛（日本製粉）の内容（経営悪化の内容）が社会に知れわたり、日紛は営業不能に陥ってしまった。その為に、一時鈴木商店が（日本製粉を）運営することになり、鈴木商店から窪田駒吉東京支店長が日紛の社長として出向せられることにきまった。

今日の日粉は盛大であるが、昔はこんな時代もあった様である。会社の運営はまことに六可敷いもので、幹部の重役は十年も二十年も先のことを考へて慎重な構想を建てなくてはならん。

（昭和 40.2.2 記）